

## 学校におけるカウンセリングサービスの拡充 ～竹園高校のニーズから考える～

M.K. <社②ゼミ>

### 1.はじめに

ストレス社会とも言われる現代では、心に問題を抱えている人も少なくない。そのような時代では、学校生活において生徒と対話し、問題を解決するスクールカウンセラーの存在意義は大きい。近年では、小中学校や高校でもスクールカウンセラーの導入が進んできた。令和4年度の統計[1]では、全国の小学校の91.3%、中学校の97.6%、高校の93.8%でスクールカウンセラーが設置されている。しかし、その利用状況については各校の差などから明確な値は出ていない。

導入が進む一方、その利用者は多いとは言えないと考える。実際に利用したという人を耳にしたことはない。利用することに抵抗を感じている人も多いのではないかと思う。

先行研究[2]では、大手大学予備校にスクールカウンセラーを設置し、授業を教える講師とクラスの担任、スクールカウンセラーでの連携を図り、相談室に来た生徒についての情報を共有したり、講師からスクールカウンセラーへ不安な生徒の相談をするなどした結果、予備校生のメンタルヘルスの向上が確認された。

しかし、このような高い設置率に反し、利用者は限られている上、相談をしたい生徒が使いやすい状況とは言えないのではないだろうか。まずは生徒がスクールカウンセラーの利用に対してどれほど抵抗を感じているかを調査し、さらにその原因を調査・考察し、またその原因を取り除く方法について考えを深めたい。

これらを通して、ストレスに囲まれている生徒がより良い学校生活を送ることができる環境をつくることを目指す。

### 2. 研究1

#### 2-1. 目的

まず、現在スクールカウンセラーとして働いている方へのインタビューを通して、必要な知識を得て、スクールカウンセラーの視点から利用が増えることが望ましいのかどうか、また生徒のメンタルヘルスの向上に必要なと思うことを伺う。

#### 2-2. 結果

スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーは複数の小中学校で働き、不登校やいじめなどの心配事に優先順位をつけて対応し、校内のPRポスターの貼り付け、休み時間の児童生徒への声かけ、生徒や保護者への相談室だよりの作成を主に行っていると分かった。カウンセリングの利用者に

ついては、悩みを持っていない人でもよく、誰かに話をするだけでも気持ちを軽くする効果があるため、より多くの人に利用してもらうことは望ましいこととしていた。また、教師とスクールカウンセラーの連携も、支援が必要な生徒への対応に必要なことであることがわかった。

### 3. 研究2

#### 3-1. 目的

竹園高校においてスクールカウンセラーを利用したことがある人が本当に少ないのかを調査する。

#### 3-2. 方法

##### 【1】調査対象

2023年10月に、茨城県竹園高校の一、二年生を対象にGoogleフォームで質問紙調査を行った。有効回答数は79名であった。

##### 【2】質問紙

竹園高校においてこれまでにスクールカウンセラーを利用したことがあるか、「ある」「ない」の二択で回答を求めた。

これまでにスクールカウンセラーを利用したことがあると回答したのは1名で、利用したことがないと回答したのは78名であった。

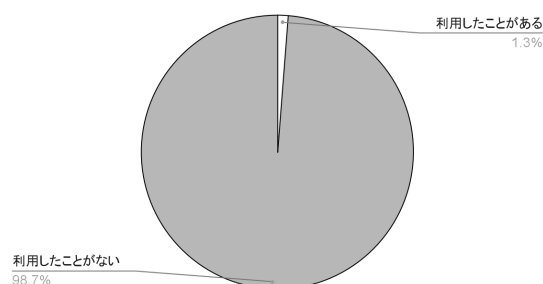


図1  
相談室利用経験の有無

### 4. 研究3

#### 4-1. 目的

スクールカウンセラーを利用したことがない人は、何を理由に利用していないのかを調べ、更にその参加者の精神状態を調べ、それらの関連を調べることで、スクールカウンセラーを利用していない人がカウンセリングを必要としている人なのかどうかを調べた。

#### 4-2. 方法

##### 【1】調査対象

2023年11月に、茨城県竹園高校の一、二年生を対象にGoogleフォームで質問紙調査を行った。有効回答数は18名であった。

##### 【2】質問紙

18名に対し、スクールカウンセラーを利用したことがあるかを尋ね、「利用したことがない」と答えた人に対して、利用しない理由を、先行研究[3]で堀田らが用いていた項目を利用し、「恥ずかしいから」「利用の仕方が分からないから」「行っても解決しないと思うから」「知らない人に相談したくないから」「聞いて欲しいことがないから」などの12個の選択肢を与えて回答を求めた。それぞれの選択肢において、1～4の段階でどれほど当てはまるか回答を求めた。更に、12の選択肢のうち6つを「相談室利用への不安因子」、3つを「相談希求の拒否因子」、3つを「相談ニーズの希薄因子」として分類し、分析に利用した。

また、GHQ-12項目と呼ばれる、精神医学的障害を検出するための質問紙を用いて、18名の精神状態を調べた。この質問紙で得られた回答のうち、「当てはまらない」に近い2つを0、「当てはまる」に近い2つを1とし、すべての数を合計した値が3以上であった人を異常、3未満であった人を正常とした。

#### 4-3. 結果

「相談室利用への不安因子」に最も影響を受けたのは5名で、そのうちGHQ質問紙の結果「正常」とされたのは1名、「異常」とされたのは4名であった。「相談希求の拒否因子」に最も影響を受けたのは5名で、そのうち「正常」とされたのは3名、「異常」とされたのは2名であった。「相談ニーズの希薄因子」に最も影響を受けたのは8名で、そのうち「正常」とされたのは5名、「異常」とされたのは3名であった。正常とされた人の中では、相談ニーズの希薄因子に影響を受けている人が最も多かった。異常とされた人の中では、相談室利用への不安因子の影響を受けている人が最も多かった。

表1

GHQ-12項目質問紙から分析した異常者と正常者が最も影響を受けた因子(人)

|    | Factor 1 | Factor 2 | Factor 3 |
|----|----------|----------|----------|
| 正常 | 1        | 3        | 5        |
| 異常 | 4        | 2        | 3        |

Factor 1:相談室利用への不安因子

Factor 2:相談希求の拒否因子

Factor 3:相談ニーズの希薄因子

#### 4. 考察

竹園高校において、カウンセリングサービスを利用したことがない人は9割以上を占めていて、GHQ-12項目質問紙でも18人中9人は異常とされた。このことから、カウンセリングサービスを利用することでメンタルヘルスの向上が期待できる生徒はいると考えられる。しかし、異常とされた人の中では相談室利用への不安因子に影響を

受けている人が最も多かった。よって、相談室をより利用しやすくする取り組みが必要であると考ええる。また、相談希求の拒否因子に影響を受けている人もいたが、カウンセラーの方の話によれば、誰かに話をするだけでも気持ちを軽くする効果があるため、生徒が相談してみたい、話してみたいと思わせるような工夫が求められる。悩みがないと思っている人でもカウンセリングサービスを受けることはメンタルヘルスの向上に効果的であるため、今より多くの人を利用しやすい環境整備が必要であると考えられる。竹園高校でスクールカウンセラーを利用するためには、クラス担任を通して予約をすることが必要であり、利用のしやすさを損ねている要因のひとつである。全ての人がより利用しやすくなるためには、利用のための予約を個人的に行える仕組みに変え、その利用方法は相談室だより等を活用して周知することが効果的であると考えられる。

#### 5. おわりに

今回の研究では、Googleフォームへの回答数を多く集められず、少ないデータで分析を行ったため、正確とは言えない分析になった。これからはアンケートの母数を増やすために、告知方法を工夫するなどしてより正確な分析を行えるようにしたい。

#### 謝辞

本研究を行うにあたって、ご指導をくださった佐藤先生、アンケートの回答にご協力いただいた生徒の方々、その他研究にご協力してくださった全ての方々に厚く御礼申し上げます。

#### 参考文献

- [1]文部科学省「令和4年度学校保健統計調査」
- [2]元永拓郎(2002)「学校メンタルヘルスサービスの活動評価の試み」こころの健康 第17巻 2号33-49頁
- [3]堀田愛(2006)「中学生・高校生の悩みと相談に対するニーズ(4):校内相談室の非利用者に焦点をあてて」日本教育心理学会発表論文集 第48回総会発表論文集 PA079